

『水の透視画法』
辺見庸著／共同通信社

この本は絵画技法の本ではない。共同通信社が加盟紙に配信する一本が2千字程度のコラムを集めたものだ。身辺雑事から始まり、現代の諸問題、哲学的考察などにつなげていくパターンの凝縮していかつ読みやすい話が続く。

著者の共同通信記者時代については同社外信部に勤務していた友人からいくつかのエピソードを聞いた（本人には未確認）。赴任先の北京から送られてくる原稿はデスクが筆を入れる余地はない「完全原稿」がほとんどだったとか、会社の飲み会で同席していた上司の編集局長がトイレに行っていた隙に、自分のおしっこをビールジョッキに注ぎ、それを戻ってきた上司に飲ませて反応を観察したとかいうものだ。

本書には「破滅の予兆」が満ちている。コラム「予感と結末」には予感だけでなく、3.11に直面し、ことばの無力さを思い知らされたことが記されている。

突然、見たこともない大地震と大津波が生まれ故郷（註1）をおそった。地軸が揺らめき、水がそばだち、そこかしこに火柱が立った。多くの友人、知人を失った。原発禍を含め、こんなぞら恐ろしい光景は眼にしたことがないはずなのに、しかし、私は正直ほのかな既視感を覚えないうでなかった。それは幾世代も前の夢の記憶が、はからずもからだのおくの涸れ井戸からじわりとしみだてきたような、にわかには語りえない悲しくも無力な感覚であった。

（中略）

ことばは巨大なできごとにおいていかれ、できごとの外形や現象の一端を稚拙に表しえても、本質の深みに迫ることはできないであろう。そのことは、災害につけ戦争につけ、ことばというものがただに工学的事実や技術表現の道具となりさがり、人間の底なしの内面への執着と関心をながく失ってきたことと、たぶん、かかわりがある。

既視感については、9.11の米同時多発テロの際も同様な指摘を聞いたことがある。スイスの精神医学者カール・ユングの主張する「集合的無意識」かそれともハリウッド映画の記憶だろうか。原発については、1986年のチェルノブイリ原発

事故の記憶もあり、いつか途方もない大惨事が起きるのではないかとかすかな予感めいたものを抱いていた人は少なくなかったのではなかろうか。

3.11の大地震・大津波・原発禍の現実に関係者のみならず一般市民の、空想を遙かに凌駕したものであり、それこそがことばの無力を思い知らせる原因だったと言えるだろう。

そして日本文学は3.11という圧倒的な現実を前に昨年は事実上、“沈黙”していたのではないか。高橋源一郎の『恋する原発』（講談社）は「不謹慎」で「挑発的である」と一部で話題となったが、構成に難があることは否めない（本稿では詳述しないので、興味のある方は文芸誌『群像』にも掲載されているので図書館で読んでください）。

また、辺見は「マネー資本主義の暴走」が引き起こしたリーマン・ショック（2008年）後の世界経済の状況と日本社会の現実を目の当たりにして「世界恐慌」は間近いとの主張を展開する。3.11に加えてもう一つの「破滅の兆し」を感じ取っているようだ。

コラム「幻夢をかすめゆく通り魔 夢野久作の歌といま」で、夢野の『獵奇歌』に触れながら、「資本」の支配する世界への批判を展開する。

この世界では資本という「嘘」が、道義や公正、誠実といった「実」の価値をせせら笑い、泥足で踏みにじっている。そのような倒錯的世界にまっとうな情理など育つわけがないだろう。なかんづく、実需がないのにただ金もうけのためにのみ各国の実体経済を食いあらし、結果、億万の貧者と破産者を生んでいる投機ファンドの暴力。それこそが世界規模の通り魔ではないのか。つるつるのサイバースペース（仮想空間）に過ぎない嘘のモニター画面が、これも資本のしわざだが、人間の実像をしめだし、内面をも占拠してしまっている。実と虚が逆転してしまった世界では、正気と狂気の位相ももはや見分けがたい。秋葉原事件とはそうしたなかで起きるべくして起きた人間身体の“発作”ではなかったか。

昨年、ニューヨークで始まった、「ウォール街を占拠せよ (Occupy the Wall Street)」と主張する抗議行動が発端となり、「格差社会」に抗議する同様な抗議活動が全世界に広まり、今でもくすぶっている。「1%の富裕層が99%の貧困層を支配している」などのスローガンは正確さには欠けるかもしれないが、リーマン・ショック以後の社会の空気を反映している。米国の銀行や投資会社は、サブプライムローン（低所得者向け高金利住宅融資）を組み込んだ金融商品の販売で巨額の利益を上げた。米大手投資会社（現在は銀行）ゴールドマン・サックスの社員
の平均年収はリーマン・ショックの前には約7千万円にも達していたなどのレポートもある。そして細かい説明は省くが、住宅バブルの破裂で同金融商品は事実上の「紙くず」と化し、リーマン・ショックを引き金とする世界金融危機に発展していった。ローンが払えず、銀行に差し押さえられた住宅の「片づけ請負人」のエピソードは例えば、米小説家ポール・オースター (Paul Auster) の近著「サンセットパーク (Sunset Park)」などで活写されている

欧州でもマネー資本主義が跳梁跋扈（ちょうりょうばっこ）している。債務（借金）危機がユーロ圏で続き、不況の深刻化、緊縮財政政策の強化による失業や倒産の増大、生活苦の深刻化など暗いニュースがギリシャ、ポルトガル、スペイン、イタリアなど南欧諸国からほぼ連日のように報じられている。

辺見は資本の支配する世界を厳しく批判するが「社会主義」や「共産主義」、「社会主義中国」を称揚しているわけではない。2008年の北京オリンピックの際、辺見は中国を再訪。そのとき書いたコラム「東風は西風を圧倒したか」の中で、「『乏しきを憂えず、均（ひと）しからざるを憂う』といった中国古来からの価値観とおよそ反対の、あくことのない物質的欲望」をオリンピック・スタジアム「鳥の巣」や北京の金融街に感じたという。そのうえで、「北京から汗のにおいが消え、東京やニューヨークと大差ない商業的つくり笑いがあふれている。索漠とした空虚感も。」と手厳しい。

辺見は共同通信を退職後、連続して大病を患い、右の手足が不自由となり、リハビリ中であることを本書で明かしている。しかし、彼の体調が「破滅の予感」に結びついているとは到底思えない。そして、「情報技術の革新によって経済・社

会システムが地球規模でめまぐるしく変化している今は、産業革命期をはるかにこえる人間環境の大動乱期」(註2)であると位置付けたうえで、その全局面を冷徹に俯瞰している慧眼(けいがん)の思想家や哲学者は少ないようだと言嘆く。

そうした中で、辺見はことばの力を信じ、現実の本質に迫ろうともがく。

註1) 宮城県石巻市。

註2) 本書のコラム「おとしめあう世界一動乱と詩集について」より

執筆者紹介

村上 直久

経営情報系准教授。専門領域は、国際関係論、メディア英語論。

『書名』 著者名 翻訳者名 出版社または文庫・シリーズ名 出版年 税込価格

『水の透視画法』 辺見庸著 共同通信社 2011年 1,680円

『恋する原発』 高橋源一郎著 講談社 群像2011年11月号掲載 2011年 品切

ブックガイド目次へ